

ぐるっけ

平成六年七月二十七日第三種郵便物認可
平成二十一年一月一日発行（毎月一回一日発行）
第十五卷第九号（通巻第一七七号）

鈴



ぐるっけ

新春号

第177号

俳句雑誌

GLOCKE

1. 2009

謹賀新年

屋久太鼓

品川 鈴子

切干はちぢれ素焼きの窯入れ日

胸底も朽葉の溜まる廻遊池

榎檀据ゑ門代はり破れ祠

屋久太鼓鉦と手拍子撥鼓



買初めは故友の古書をワゴンより
初膳に出す古九谷はあと幾度
文運に見切りをつけて年新た
屠蘇を酌む三三九度の土器かわらけで
屠蘇注げば指細き夫蘇る
初夢の胸苦しくも孤閨なる



玉

鈴

吟

兵庫 勝野 薫

出航の銅鐸 秋天にテープ抛る
秋潮^{うしお}デッキ・ウオーク 朝焼けに
秋^{あき}微^い雨 木肌の柔し 紀元杉
秋潮のうねりにかまけ 旨^{うまい}寝^{まい}せず
昼暗しガジユマル園に秋蚊鳴く

兵庫 金田美恵子

初句会鉛筆確と削りたる
初明り紀淡海峡色変わる
喰積やセピア色なる母のメモ
また一つ字郡消ゆ年賀状
喰積は故郷の味 母の味

兵庫 唐鎌光太郎

秋深し終着駅に猫居着き
連れ立ちて猪の子二頭山出づる
秋の暮大和路線を遠回り
丹波畑枝豆売りに人だかり
鉄橋の影黒々と水の秋

兵庫 川合まさお

海神の大鈴括る野分前
片方のズボンのみ揺る案山子かな
化石層の掘削跡や威銃
下顎の欠けし狼犬曼珠沙華
秋桜廊下のきしむハンター邸

大阪 河村 泰子

海亀の泪のあとや殻拾ふ
海に帰る亀の脚跡まだ残り
白骨の珊瑚みぎはに秋寂びぬ
秋雨や糶まつ屋久の貯木場
屋久杉の仏龕誇る島の秋

東京 北川とも子

とろとろと頃合よろし冬瓜煮る
爽籟に総身するりと委ねけり
青きまま落ちし毬栗手の平に
秋天へ石の階登りつめ
金木犀夜の静寂を香りけり

兵庫 北島 明子

逢ひに行く青山通り草の花
江戸時代からの庭園糸瓜垂る
思ひきり腕の屈伸天高し
図書館に聞く雨音の暮れ早し
玄関のインターホンから虫の声

兵庫 木原 今女

屋久杉に纏ひ付きたる苔の露
千年を生きて露けし屋久の杉
船の揺れかワインの酔か踊の夜
すゝきはらどの径とるも城の濠
羊雲見慣れし街へ帰港せり

愛媛 木村 美猫

砂糖黍汁搾りつつ痴話喧嘩
千草摘む四、五人島の幼稚園
夕霧に忽ち消ゆる神の島
茶銘聞くころあひ不意にちちる虫
一会に酔ふ老若男女芭蕉祭

兵庫 久保田由布

馴染みなきマーチで出入り運動会
行進も綱引きも無き運動会
草紅葉野のものは野で見るがよし
咳き咳きて身内どこかの螺子外る
燈火親しむいつまでもワープロ派

兵庫 藏元博美

三老女続くおしゃべり秋の午後
残り酒ぬくめ独りの夕餉かな
秋晴れや機影を映す昆陽の池
蟋蟀のソロ演奏に聴き入りぬ
年金の話止まらぬ敬老日

兵庫 栗田武三

巨船なほ揺らす野分の名残波
室戸沖飛天に似たる秋の雲
賑やかに秋の北斗の下を航く
目に見ゆるもの海原と秋燕と
船端に凭る乱れ髪雁渡し

大阪 小阪律子

南国の祭り双子のフラガール
奥駈けの入り白塞ぐ霧襖
五年生一坪の田の稲を刈る
田仕舞いの煙目掛けて消防団
年毎に白さ増しくる鉢の蘭

東京 後藤とみ子

秋晴れを皆口にして今日の晴
秋の航耳奥かゆき微振動
無月らし甲板に出て後退り
母が家を出て草の実に気づきたり
新しき洗面台に水澄みて

薬草歳時記

(一七六) ホンダワラ (穂俵)

須賀悦子

逆潮やたちあがりたるほんだはら

加藤 楸邨

新年の季語となっている薬草は数少ない。春の七草、^{ホトトギス} 福寿草、千両、^{アザミ} 齒朶、^{トウモロコシ} 野老、^{ダイダイ} 橙、^{カキ} 朮、^{トウキョク} 長老木、など、およそ、陸の草木ばかりであったが、この穂俵は、神馬藻、莫鳴菜、たわら藻、ともよばれ、褐藻類のひとつ目立つ大きな海草である。沿海の深いところに三メートルから六メートルの海中林になっているらしい。

その成長の早さと大きさに注目され、サトウキビやトウモロコシなどを原料としているバイオマスエタノールの生産に最近ホンダワラを使用する計画が進んでいると聞く。実現すれば、食料との競合も回避され、二酸化炭素の吸収だけでなく、海洋の浄化にも役立つとして期待されている。宮城県から南九州の太平洋岸、新潟県以西の日本海側に広く分布しているので、日本がバイオ燃料の生産国となることも夢ではない。

薬用部は全藻（海藻カイソウ）。必要時に全藻を引き上げ真水で洗い、日干しにする。全藻にはアルギニン酸、マンニト、ヨード塩、鉄、カルシウム、イオウ、粗蛋白質なども含み、抗凝血作用、利尿、物質代謝亢進作用などあり、海藻の水浸剤にも、血中コレステロール量の低下、および降圧作用が認められる。また、利尿、去痰、消腫薬としてリンパ腺腫、水腫、睾丸腫痛などに用いられ、漢方処方では「海藻丸」にも配剤されている。

古来より新年の飾り物に、ホンダワラを乾燥させて藁で束ね、俵の形にしたものを蓬莱台にのせて正月のお祝いとする習慣があるようだが、私には経験がなく、今夏、この稿を書くに当り東北の八戸に行った際、地元の漁師さんに尋ねたところ、「いくらでもあるから持って行っていいよ」といつて、山ほどある穂俵を大きなビニール袋に入れてくれた。又、隠岐島に寄った時には、この島の青年部の人達が、この穂俵を島の特産物にしようと「神馬茶」と銘打って、粉を袋詰めにし、お湯に溶かして飲むように包装、健康茶として一袋六百元で販売されていた。昆布茶のようで飲みやすく感じた。

参考文献

「牧野和漢薬草大図鑑」北隆館

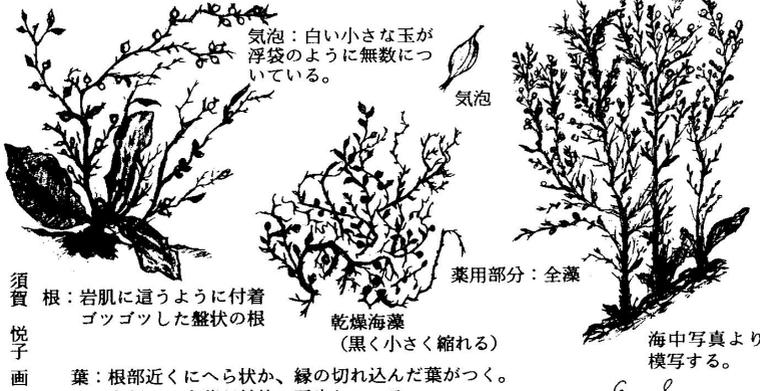
著者略歴 神戸薬科大学卒

ホンダワラ (ジンバソウ、ナノリソ、ホダワラ) 馬尾藻、神馬藻

〔ホンダワラ属〕 (ほんだわら科)

Sargassum fulvellum C.Agardh. (=S.enerve C.Ag.)

藻丈：1～6 m



須賀悦子画

根：岩肌に這うように付着
ゴツゴツした盤状の根

気泡：白い小さな玉が
浮袋のように無数につ
いている。

気泡

薬用部分：全藻

乾燥海藻
(黒く小さく縮れる)

海中写真より
模写する。

E. S.

葉：根部近くにへら状か、縁の切れ込んだ葉がつく。
上部には小葉が棘状に互生している。
茎：長く3稜形でゆるくねじれ上部で分枝する。

ホンダワラ藻塩作りは古代より	歳月や怒濤に返すほんだはら	穂俵も七日事なき深みどり	ほんだはら荒磯の匂ひなつかしき	雪来るか海の匂ひのほんだはら	海幸のほんだはらなど奉る	穂俵に乾ける塩のめでたさよ	ほんだはら速吸門の渦に浮く	ほんだはら黒髪のごと飾り終る	蓬萊の島や築出すほんだはら
*片野光子	伊丹さち子	竹原 泉園	高橋淡路女	山田みづえ	下村 梅子	後藤比奈夫	阿波野青畝	山口 青邨	貞 室

(ぐろっけ)

鈴の奏

品川鈴子選

永き日の夕べの卓のムール貝 大阪 井上あき子

白百合にわか耶蘇の身ケルズ十字切る

緑陰に読書する青年ひとナンシー派

ラヴェンダー残り香のまま握手する

耳遠き兄に手紙を秋灯下 兵庫 先山 実子

老う程に手抜き料理の大根煮る

三十秒夫の手を借り障子貼る

瀬戸内に生まれ育ちて牡蠣が好き

会席膳勿体振りし初紅葉 兵庫 渡邊 米子

ドレスアップ夜食のメニュー聞き流す

石垣を這ふて零余子のよく育ち

通草挽ぐ孫の土産と言訳し

秋祭り語彙増えし児も法被にて 愛媛 濱田ヒチエ

先輩の畑にいたただく白い菊

家の陰花立ち上げし石露の色

昨日今日毬栗落ちる鈍い音

骨拾ふ西方浄土は大夕焼 兵庫 中井 光子

秋雲と友と下りぬ長良川

新涼やほかほかパンにコーヒーマ香

明治館ガラスは澄んで秋の空

星月夜巨船ふねの高さに身を慣らし 大阪 島 純子

再訪の屋久は秋雨夫婦杉

夕霧の友ヶ島より湾に入る

鹿よぎる千尋の道バス止めて 兵庫 四葉 允子

めざすベンチ昼寝の男に占拠さる

日時計の指針くつきり秋晴るる

晩婚の宴つづけり秋日和

クラス会酸橘をいつも手土産に 兵庫 前田 玲子

こぼれ萩石の狸もほろ酔いて

鳩時計過去過去と鳴る夜半の秋

老大工木切れにメモや草紅葉

初紅葉小さき手足空を打つ

蛭狩り勝尾寺川の水匂ふ 大阪 小菅美代子

背筋伸ぶ歌舞伎棧敷の単帯

秀 鈴 記

巻頭 三句 品川 鈴子 評

四句〜十五句 野口喜久子 //

*選句は全て 品川鈴子

永き日の夕べの卓のムール貝 井上あき子

ムール貝はフランス語でイガイのこと。地中海料理によく使われる紫胎貝もメニユーにあり、旅先では時間に追われることもなく、ゆったりと晚餐を楽しむ。日頃の夕食とは違う気分を省みて、暮れなずむ旅情に浸るひととき。

通草挽ぐ孫の土産と言訳し 渡邊 米子

滅多に見かけない通草の実が蔓から垂れ、紫色に美しく熟れて、縦の裂け目に白い果肉が覗く。絵に描きたくなるような風情に、つられて挽ぎ帰るのを、孫への土産などと言いつくと、連れも微笑ましく頷いてくれる。

三十秒夫の手を借り障子貼る 先山 実子

家族も多く蒲団の仕立て直しや障子の貼りかえは女の年中行事のようだった頃から、手先の器用な主婦はさほど苦にもせず、手際よく障子紙を裁ち、刷毛で糊をつけた棧へ、歪まずにびんと貼り付ける。その折だけ紙の端を支えてもらう夫。手を借るのは間髪入れぬ一瞬だが、これこそ皺や弛みのない仕上りの要。阿吽の手助けに夫の面目躍如。尊い三十秒が息の合った夫婦を物語る。

秋祭り語彙増えし児も法被にて 濱田ヒチエ

収穫も終え、村中総出の秋祭り。笛や太鼓の音に誘われ大人と揃えの法被姿の幼児。きりりと鉢巻何とも微笑ましい景が目につかぶ句です。その上片言ながらも会話が出来るまでに成長された過程を「語彙増えし」とは「言い得て妙」。ますます円満な家庭が想像されます。

新涼やほかほかパンにコーヒー香 中井 光子

「喉元過ぐれば熱さ忘る」ふと思わせる句です。地球温暖化の影響で盛夏は60度を超える日もしばしば。季節の移りを敏感に捉えられた感性豊かな作者と伺われます。

モカそれともブルーマウンテン珈琲の香りが漂うてきます。

再訪の屋久は秋雨夫婦杉

島 純子

三十年程前に御夫婦水入らずの旅をされたとか。この度、ぐろつけ句会にて再びその地を踏みしめ懐かしさも一入。それを一句に纏められ奥深い作品になりました。感傷的にはならず屋久杉を敢えて夫婦杉と下五にどんと据え、現在の自分の姿を亡き夫に報告でもされているかのように伺えました。

クラス会酸橘をいつも手土産に

四葉 允子

友達に会える喜びは格別。しかし年毎に出席率もまゝならずと云ったところ…。

酸橘は徳島の特産。恐らく我家自慢の挽ぎたてを御持参の予定。それを密かに当てる友々。頂戴すれば奮発し

て松茸、いや旬の焼魚にたつぷりと振り掛けてと主婦の腕が騒ぐ愉快な仲間の集い。

こぼれ萩石の狸もほろ酔いて

前田 玲子

通帳を腰に提げた豆狸が想像され、楽しい句です。豆狸は伝説的な動物。灘の酒造倉ではこれが棲んでいないといい酒が出来ないと言われていたらしい。一方萩は咲くと同時に音もなく散りそめ、何とも静かな仔まいの中にほろ酔いの狸の取合せは絶妙。

背筋伸び歌舞伎棧敷の単帯

小菅美代子

富安風生の〈単帯その人らしく着こなして〉の句が頭を過ぎった。紹や紗等の模様も涼しげにきりりと結び、盛夏を忘れさせてくれた和服姿に作者はしばし見惚れてしまった。女性ならではの目の付けどころ。季語がとても生きている句です。もしや歌舞伎の御鬘肩筋では。